

どうしようもなく壊れてゆくカップル

松本侑壬子・ジャーナリスト

どうしたらいいのか。何が悪かったのか。喧嘩が原因でもなく、まだ相手への思いは断ち切れていず、だからといって相手を救い出すすべもなく…まったく煮え切らない話である。煮え切らない男を愛している女の話である。一見歯がゆい。けれど、じゃあ自分だったらどうする？ となると――プライベート・フィルム風のビデオ作品だが、問いかけは相当に重く深い。

東京の片隅で暮らすあるカップルの秋から春への半年間の物語である。狭い二間のアパートの壁際に据えたカメラが、季節の移ろいととも色あせほどけていく2人の関係を凝視するかのようだ。気持がふわりと漂い出したパートナーと、必死で絆を結び直そうとするヒロイン・志津のあせりと不安が手に取るように伝わってくる。

志津と一緒に住んでいる恋人・北川は、ある日突然パニック障害と診断され会社を退職、自宅でできるパソコンのデータ入力の仕事を始める。そのためのセミナーにも通っている。それでも2人の関係は変わらず、毎朝の食事どきに交わす会話も相変わらず淡々と“普通”であった。

ある日、志津が帰宅すると北川は居ず、窓際に部屋となじまなぬ黄色いソファがあった。初めて無断外泊して戻った北川は、腕に見慣れない数珠のブレスレットをしており、問いただすと妹のインド土産だという。平気で嘘をつき、それを追及されるとああ言えばこう言う風に(へ)理屈で言い逃れる北川。そんな人間ではなかったのに…。北川の変容に志津の違和感が次第に不安から怒りへと膨らんでいく。

2人が共同で貯めていた預金の中から無断で40万円が引き出されていたのを発見した志津は、それがソファの代金であり、北川が通っているセミナーとは宗教団体のものなのではないかと気づく。案の定、北川はしきりに「体内のカルマの浄化」とか「認め合う家族」とか口にして、志津を説得しようとするのだ。

「私があなたの力になるから。何でもするから」と志津は恋人を元の“普通”の世界に引き戻そうとするが、北川の心はもはやここにはない。志津に隠れてする電話、はてはストレスから尿を漏らしてしまう始末。志津は、北川のために転勤を断って失職、次第にふさぎ込むようになる。

志津の留守中にセミナーの信者が北川を訪ねて来て、北川に儀式を施し、君を新グループの副班長に推薦したいと言う。北川は何だかじっとしていられず、憑かれたように深夜の公園を走り回るが、志津は「気持悪い」と思う。そして北川を病院に連れて行こうとするが、北川は自らの腕に恐怖感を表す無数の目を描いて抵抗する…。

カップルの1人を取り込んだ怪しげな宗教が、悪夢のような不安感を増殖しながらじわじわと2人の間に溝を掘り深めていく様子は、妙にリアルで背筋が冷たくなる。高橋監督は「これは宗教の映画でもパニック障害の映画でもない。100%の純愛映画だ」と語っている。共に求め合い、歩み寄ろうとするとかえってお互いを傷つけ、二人の関係がぼろぼろと崩れ落ちてしまう。さながら蟻地獄の恐ろしさである。これをしも純愛と言うならば、純愛の地獄のドキュメントとでも言えるだろう。



日本映画(90分) / 高橋 泉 監督

『ある朝スープは』

7月30日からユーロスペース(東京)にて公開 全国順次公開予定

